

本大学、短期大学における政治学の講義についての実践報告

竹 澤 由 記 子

Praxis on introductory course of Political Science at OJU/OJC

Yukiko Takezawa

抄 録

本報告は、本大学、短期大学における政治学の講義を行った内容と学生の反応についての実践報告である。本講義では政治学を専門としないが政治を学ぶ必要性を比較的強く認識している学生に対して、政治への関心と政治学の入門としての知識を身に付け、さらにはその主な用語や概念の学際的理解を目指してもらおうべく、パワーポイントとワークシートを用いた講義型形式に加えて、毎回授業の終わりに学生に講義の内容に対する理解を記述してもらう時間を設け、その理解度の確認を行った。その結果、数多くの学生が学んだ用語や概念を記述やプレゼンテーション形式で説明することができ、政治参画の重要性を認識し、政治への関心と理解を深めることができた、というコメントを得た。

キーワード：政治学入門、本大学・短期大学における政治教育

(2019年9月24日受理)

Abstract

This paper describes the contents of an introductory course of political science in OJU and OJC. The instructor (author of the paper) gives lectures incorporating Power Point presentations and distributes instructor-prepared worksheets based on the textbook. There are also worksheets on which students write their understandings of the contents of the theme of each class at the end of every class meeting. In the comments on the worksheets, students indicate their successful understanding of the major terms and ideas of political science.

Keywords: Introduction to Political Science, Political Education on OJU/OJC students

(Received September 24, 2019)

1. はじめに

本稿の報告者は、今年度春学期において本学で政治学の講義を担当した。大学教育における政治学の講義の重要性を考えるうえで、若年層の政治への関心の低さ、投票率の低下についての議論があり、政治学において「何をどう教えるのか」、教育内容の再検討についても言及されている（小野 p. 36）。2015年6月の改正公職選挙法の公布、また翌年6月の施行により、投票権は18歳に引き下げられた。2010年の日本学術会議の政治学委員会・政治学教育展望分科会の報告によると、「政治学教育は、有権者教育として今まで以上に重要となっている。政治学教育は、ナショナル・ミニマムとしての単なる有権者教育を超えて、多元的なガバナンスを担う市民、基本的な「デモクラシー」という原理を踏まえて問題点の所在とそれが持つ問題の普遍性を一つの対立点として提起し、議論する市民を育てる重要な学科としても重視される必要がある」（日本学術会議 政治学展望分科会 P. 7）とある。大学教育において政治学の学びの重要性は本学においても同様であるという認識のもと、本学での政治学の講義の一事例として、講義の概要と学生の理解について、本実践報告にまとめることとする。

本学の学生と政治学の講義についていうと、本学は単科大学、短期大学であるため、学生は四年制大学の学生は英語国際学部、短期大学では英語科に所属しており、政治学や法学を専攻とはしていない。国際問題に関する講義が日本語や英語で開講されているため、社会問題への関心は低くはないといえるものの、他の多くの大学と同様、政治学を日本語で学ぶ目的は公務員試験対策であるように捉えられがちであった。このような位置づけのなかで、本政治学の講義が本学の学生にどのように受け止められ、また講義からどのような政治学の入門的知見を得たのかについて、学生へのアンケートや配布した講義ワークシートの記述内容から提示したい。なお、講義の方法そのものについての新規性やその効果について言及することは、講義の回数を重ねてから行うべきであるため、本報告では行わず、今後の課題としたい。

2. 本講義の形態—科目の位置づけ、受講人数、授業形態、評価方法

まず、本講義の概要について説明する。本学における本講義の位置づけとしては、選択必修科目のなかの専門基礎科目であり、2年生以上の学生が履修を選択できるものである。シラバスに記述された目的としては、「法学・経済学・社会学とならび人間と社会の関係を扱う社会科学科目として、国内政治・国際政治の両面にわたる課題に対して、問題の所在を明確にし、分析していく力を養うことができる」であり、また授業の概要としては、「現代社会における主要な政治課題を取り上げ、国内政治問題の処理と国際政治の主要紛争事例を検討する。権力・政策・支配・自治・交渉に関する国家やその他の行為主体の作用を、歴史と比較の視点から明らかにする。」であった。授業の形式については、第十二回までは主に講義形式で行い、第十三回、第十四回はプレゼンテーションの準備と発表を

行った。

つぎに、本講義で使用した教科書は、砂原庸介、稗田健志、多湖淳著の『政治学の第一歩』有斐閣（2015年）である¹。第1章「政治のとらえ方」から第12章の「国際社会と集団、個人」までの構成であり、数多くある政治学の教科書のなかでも、章の項目が過不足なく分配されており、政治学を専攻としない大学生が入門として、用語や諸概念を覚えるだけでなくその成り立ちを学際的に理解してもらえるのに役立つと考えて選択した。他にも参考図書として、後述の参考、引用文献に記載した教科書も一部使用した。

本講義の受講者数は、単位登録者数が60名（最終57名）、単位合格者が54名となった。学年の内訳としては、2回生（大学18名、短期大学9名）、3回生20名、4回生6名、その他（5回生以上、留学生）が4名であった。各回の出席者人数は、最多で53名、最少で43名であった。

本講義では、主に教科書を参考にした空欄記入式レジュメ（A3ワークシート）を講義担当の筆者が作成し、講義前までの課題として事前に配布したものを用いた。講義中は空欄の回答が書かれたパワーポイントをもとに説明を行い、学生が内容を理解しながら空欄の回答を確認していく形で進めていった。また授業の後半には、授業の内容から指定の設問（2～3問程度）と、講義内容から理解できたことや分かりにくかった点について回答する提出用の記述ワークシート（A4ワークシート）を毎回提出してもらった。

本講義の成績評価については、先述の提出用ワークシートについて、成績評価の平常点（50パーセント）の主要部分とし、その記述内容については主に「優（Very Good）」「良（Good）」、「可（OK）」と評価し、講義担当者によるコメントでフィードバックを行った。また、第13回と第14回プレゼンテーションの準備と発表をしてもらい、今までの講義内容からテーマを選び、1人～6人程度の個人またはグループでプレゼンテーションを行った（成績評価の10パーセントとした。そして残りの40パーセントは、講義内容に関連したトピックに関するレポートを課題とし、前半は教科書等の内容や用語の理解を説明する部分と、それに関連した歴史上や現在のケースについて調べその理解を記述し、合計4枚（A4サイズ）にまとめたものを学期末に提出してもらうこととした。

3. 主な講義内容と学生のまなび

ここでは、実際に講義において担当者が授業を行った内容について簡単に説明したあと、学生が講義からどのような理解を得たのかについて、各回に記述していく。後者の学生が得た理解については、先述の提出用ワークシートに学生が記述した内容を主に参照していく。

3. 1. 導入にあたって

第一回の講義においては、本講義オリジナルで「私たちと政治」という講義タイトルとし、本講義を履修する学生たちが政治学を学ぶにあたり必要な基礎知識の確認と、たとえ

政治学を専攻分野としていなくても学生（私たち）が政治と関わっていることや、その関わりについて学問的にどのように捉えていくのかについて、考えてもらう機会とした。教科書の問いかけにあるように「私たちはなぜ政治を学ぶのか」質問に対し、そもそも「私たち」とは誰なのか、人間とはいかなる生き物であるかといった政治哲学的アプローチから、学生個人のアイデンティティという観点からの「私たち」という考え方について、包括的に考えてもらうよう努めた。そして「政治とは価値の権威的配分である」という最低限の定義がなされていることについて、政治を学問としてとらえる政治学とは、その理解によって「定義が千差万別であり、明快な定義を与えることが難しい」（砂原 p. 2）ということ、それゆえに政治は科学すべきであり、とりわけ現代の民主主義社会においては、「私たち」が政治をどのようにとらえていくべきなのか、ということを考えてもらうためのものであるということを伝えた。したがって私たちが学ぶ「政治学」とは、「人間と社会にまつわる政治という現象を理解し、それをいかに良きものにするかを考える営為・学問である。あらゆる人間に関わる現象を取り扱うものであるがゆえに、あらゆる人間にとって学ばれるべきものといえる」という前提のもと、本講義を進めていくとした。授業の最後に記入してもらう第1回の提出用ワークシートでは（以下ワークシートの設問については、資料1を参照）、設問1「政治と聞いてどのようなイメージがあるか」、設問2「興味のある教科書のテーマは何か」、設問3「なぜこの授業を履修しようとしたのか」、また任意の質問として「先日の地方統一選挙の投票に行ったか、その理由は」という内容について記述してもらった。設問1の回答としては、主に「難しい」や「政治家への不信」といったネガティブなものから、「選挙や税金など私たちと関わっている」「必要不可欠なもの」といった重要性を認識するものもみられた。設問2は、第1章から第13章までそれぞれ選択されていたが、とりわけ第12章の安全保障（6名）や自由民主主義体制、連邦制（それぞれ2名）が比較的多かった。設問3の回答については、「就職活動をするにあたって必要だと考えるから」や「社会に出る前に学んでおくべきだと思うから」といった、政治の基礎知識を学ぶ目的で履修した学生が比較的多いことが特徴的であった。ほぼすべての学生の回答が政治や政治学に興味を持って履修をしていることがうかがえた。

3. 2. 政治制度への理解

第二回の講義は、教科書第1章の「政治のとらえ方」の内容をもとに進めていった。まずは政治における秩序の成立を説明する際に用いられる調整ゲーム（ゲーム理論）については、教科書の事例やそれに加えた身近な事例を使用して、正当性や強制力によって秩序が形成されるという理論について説明するようにした。その後、ペアワークとして、「囚人のジレンマゲーム」を隣の席の学生同士で行ってもらい、「協力」もしくは「裏切り」を選択するのか考えてもらった。提出用ワークシートには、両者とも「協力」を選択したと記述した学生が過半数であった。このゲームから、学生の理解として、「知らない者どうしが選択を迫られる場合、裏切りを選択するかもしれないので、ルールや懲罰があるこ

とが秩序形成には必要であることがわかった」や、「皆が協力を選択するような秩序を作ることが権力者には求められるのだと理解した」等、ペアワークを通して政治における秩序形成の制度について、正当性や強制力の観点からも考えることができたといえるだろう。

第三回は、教科書第2章の「国家という枠組み」というテーマであった。ここではタイトルのとおり、「国家」の定義について、ヴェーバーによる近代国家の定義の要素である「領域性」、「物理的強制力の独占」、そして「正統性」の具体的理解と、それを1つの「国民」が構成するという「国民国家」の意味について、歴史的事例やその成り立ちについて説明していった。提出用のワークシートには、「国家とは1つ1つの国のことというイメージで考えることが多いが、改めて国の施設等も含めたもの」であり、「住む人々を管理・統治している組織ということ」、「また私たち国民も国家を構成する一部であること」という、国家の組織や機能への理解が記入された。また破綻国家と失敗国家についての説明では、今日存在する国家の事例についても検討してもらい、とりわけアジアやアフリカの独裁体制の国々や紛争状態にある国家、国民が著しく貧困状態となっている国々に関心を持ち、さまざまな用語を用いたものの、「破綻国家や失敗国家は改めて多く存在している」ことや、改めて国家の役割という視点から「国家が機能していないと、暴力が国内の集団の間で起こること、機能していることは安心して人々は暮らせること」といった理解を示す記述がみられた。

第四回は、教科書第3章の「政治体制」をテーマとし、主に近代国家を運営していく政治体制や政権の定義、とりわけ自由民主主義体制の包摂性、競争性、立憲主義について、教科書に書かれた定義に加え、とりわけ立憲主義については、政治的多元性を確保するための憲法による国家の拘束という役割に加えて、今日の日本における議論となっている改憲（第9条や第96条）の論点についても概要を紹介した。自由民主主義体制以外の政治体制として、全体主義体制や権威主義体制の違い、民主化と近代化の波についても、過去の事例を挙げながら説明した。「古典的近代化論」については、「経済的に豊かな国は自由民主主義体制をとることが多く、貧しい国は非自由民主主義体制となることが多いのか」という議論についても、「民主主義体制のサバイバル理論」に示されたように、経済発展が進むと、「自由民主主義体制へ移行しやすくなる」または「自由民主主義体制が定着しやすくなる」（体制の揺り戻しが少ない）という議論を紹介した。それぞれについて、学生からは提出用ワークシートにその理解を示す記述やコメントが書かれており、「古典的近代化論」については、近年の中国やアメリカ、また日本は自由民主主義体制と呼べるのか、経済発展との関係から考えると、この理論はあてはまるのかという疑問や意見がみられ、事例からも理解や関心を示すことができていることが確認できた。

3. 3. 国内政治制度への理解

第五回から第九回までは、主に国内政治制度をテーマとした。まず第五回の教科書第4章の「選挙と投票」では、事前に多くの学生が興味を示していたため、現代の自由民主

義体制における「選挙」や「選挙制度」とは何か、その機能（民意表出機能と民意集約機能）について、私たちの意見（「選好」）を最大限にかなえてくれる選挙システムとはどのようなものなのか、事例として主に日本の現在の選挙制度を説明しながら授業を進めていった。実際に選挙に行き候補者を選択するにあたり、どのように政治参加をする方法があるのか、「投票コスト」といった考え方についても解説しながら、2019年7月に行われた参議院選挙に投票に行く必要性についても、歴史的観点や定量的観点からも説明した。提出用ワークシートを書くにあたり、実際に学生が住む市町村がどの選挙区に属しているのか調べてもらい、どれだけ候補者がいてどのような公約を掲げているのか、ホームページ等で見てもらった。コメントとしては「選挙に行くべき理由が理解できた」、「自分の選挙区の候補者について、より身近に感じられる人や信頼できるかどうか、自分でできる限り情報を得て投票に行こうと思った」、「選挙に出馬し議員になり政治を変えようとするということは重要であり、今後は候補者の演説をもっと真剣に聞こうと思った」と書いた学生がいた。

第六回では、教科書第5章の「政党と政治システム」をテーマに、第五回の選挙のテーマと深く関わっている政党のしくみや利益団体の役割について、日本の事例を用いながら説明した。一般的に使用されがちな「右派」や「左派」という政治的立場の分類の根拠や、日本の政党の位置づけについても、図表などを用いて解説し、またその議論の余地についても説明した。提出用ワークシートの記入にあたって、日本の主要政党のホームページをインターネットで各自検索してもらい、その政治的主張が自分の選好とより一致する政党はあるかについて検討してもらい、それぞれ原発、改憲、増税をはじめとする政策課題に対する考え方と照らし合わせて、具体的な政党を記述した学生が3割以上であった。またコメントのなかには、「より自分の選好を実現させるためには、候補者個人を支援するよりは政党そのものを支援するほうがメリットがあるのではないかと思う」というものがあり、理解を示しているといえるだろう。

第七回は、教科書第6章と第8章の「政権とアカウンタビリティ」と「政策過程と官僚制・利益団体」とし、回数都合もあり、一部の項目を統合、削除して講義を行った。政権の理解としては、内閣のシステムや政権のタイプ（連立、少数）の説明を行い、後半では主に政策過程の段階論について、また現代政治における公共政策の多様性についても、事例を挙げてもらいながら講義を進めた。提出用ワークシートには、「アカウンタビリティとは政権が失敗をしたときに責任を問えるということが重要なことであり、自由民主主義体制に欠かせないものであることを学んだ」という理解がみられた。また各自が興味のある公共政策についても記述してもらった。あまり公共政策について身近に考える機会が少ないというコメントも多かったことから、どのような公共政策があるのかについて考えてもらう機会となったともいえる。

第八回では、第7章の「執政・立法・行政」について講義した。前提として、それぞれの機関やその役割についての再確認をおこなったあと、執政と立法の分離を目的とした大統領制や議員内閣制の違い、首相と大統領の両方が存在する世界の多様な執政制度の紹

介、二院制や委員会制度についての議論の紹介、違憲審査の意義について解説した。提出用ワークシートには、大統領制と議員内閣制は権力の集中を防ぐために重要であることへの理解や、大統領制により興味を持ったというコメントや、首相と大統領が同時に存在する場合の権力関係といった点で日本以外の執政制度に興味を持ったというコメント、また二院の優越についての議論に理解を示すコメント、委員会制度の専門性や効率性の重要性に理解を示すコメントも見られた。

第九回では、第9章の「連邦制と地方制度」について取り扱い、連邦国家についての説明とその事例、地方自治の機能、地方分権のメリットとデメリットなどを中心に解説した。提出用ワークシートには、連邦国家についてその「成り立ちを知ることができた。定義は確定しておらず、民族や言語の差によることが興味深かった」といったコメントがあった。また地方制度については、地方分権のメリットとデメリットへの理解の記述と、特にデメリットについては二重行政への関心が高かった。さらには実際に自分の住む市町村でどのような課題があるのかということについて考え、大阪都構想の問題について言及する学生や、地方自治に強い関心を持ったというコメントも複数みられた。

3. 4. 国際政治、国際社会への理解

第十回は、教科書第10章の「安全保障と平和」であり、英語・国際学部である本学の学生たちが興味を持っているテーマでもあった。まずは「戦争」と「平和」という言葉に対するイメージについて考えてもらい、言葉や絵で表現してもらった。その後、安全保障というテーマを考えるにあたっては、先人のリーダーや研究者たちが不断的な努力をもってそれぞれの平和を探求し維持し、またそのしくみを考察しようとして成功、失敗を繰り返してきたのか、ということ、そして平和を考えるにあたり切り離すことができないのが戦争という、人類が歴史上経験してきた失敗をどのように理解すべきなのか、という大きな問いから考えてもらいながら、教科書に出てくる概念について説明した。内容としては、安全保障における主要な概念について説明したが、特に軍拡をすれば自国の軍隊も脅威が増してしまうという「安全保障のジレンマ」という概念について、より理解を深めた学生が多くみられ、そのジレンマを減らすためには同盟を結ぶこと、安心共同体といった手段が対外政策の選択肢として存在していることを理解できていた。

第十一回は、教科書第11章の「国際政治経済」では、主に自由貿易の概念について、また経済におけるヒト・モノ・カネの移動という基本概念について事例を用いて説明した。また政治学においては、自由貿易に賛成する消費者よりも、反対する人々が政治力を得やすいという点においても、すでに国内政治制度のアクターとして説明した利益団体、圧力団体の事例も用いて解説した。提出用ワークシートからは、自由貿易では消費者は得をするが、損をする人々は誰なのかについての記述や、民主主義国家どうしの自由貿易協定には永続性や信憑性があることについての理解が記述されていた。

第十二回は、教科書第12章の「国際社会と集団・個人」として、まずは今日の国際関係における、主権国家の役割やその相対化、国家以外のアクターの重要性やそれぞれの問

題点などについて説明し、そのうえで現代のグローバル社会において存在する数知れない国境を越えた問題（難民問題、環境問題、貧困問題、兵器の拡散問題など）について、国際社会が、まだ学生自身がその一員としていかに立ち向かっていく、また協力し解決していくべきなのか、について考えてもらう機会とした。

3. 5. 本講義のむすびにあたって

第十三回は、最終講義となる第十四回で行うグループプレゼンテーションの準備の回とした。2名から6名までのグループとなって、教科書のなかから印象に残ったまたはもう一度復習をしたいテーマを1つ選び、その理解について5分から10分以内で発表してもらうというものである。今まで記入してきたワークシートやインターネットの信頼できる情報を使って、簡潔にまとめるように指導した。そして結果的に最終回でのプレゼンテーションのテーマ選択としては、第2章「国家という枠組み」が2グループ、第3章「政治体制」が6グループ、第4章「選挙と投票」が7グループ（うち7月21日の参議院選挙の結果からの分析も含む）、第6章「政権とアカウンタビリティ」が1グループ、第10章「安全保障と平和」が2グループ、第11章「国際政治経済」が1グループ、第12章「国際社会と集団・個人」が1グループとなった。

そして、評価の40パーセントを占める課題レポートのテーマ選択については、第1章「政治のとらえ方」から1名、第2章「国家という枠組み」が4名、第3章「政治体制」が7名、第4章「選挙と投票」が20名、第5章「政党と政党システム」が2名、第6章「政権とアカウンタビリティ」が1名、第7章「執政・立法・司法」が2名、第9章「連邦制と地方制度」が3名、第10章「安全保障と平和」が7名、第11章「国際政治経済」が4名となり、第4章「選挙と政党」を選んだ学生が一番多くなった。学期中に3度も統一選挙があったこともあり、また若者の政治離れといった身近な問題から関心をもった学生が多かったのが理由と考えられる。また、第10章の「安全保障と平和」も、自衛隊や沖縄基地問題、同盟関係やその問題、国際紛争など事例も多岐にわたっていた。3つ目に多かったのが第3章の「政治体制」であり、現代や歴史上の具体的な国家や政治体制（権威主義体制、破綻国家など）について各自の理解が書かれており、どれもまだまだ完全な理解には至らないものの、政治学を専攻としていない学生としてはそれぞれの関心に基づいて比較的理解度の高いレポートを仕上げていたと評価できる。

最後に、最終回の講義での提出用ワークシートには、「受講前と比べて政治への理解が深まり、もっと深く勉強してみたくなった」や、「政治は用語が難しいので高校の時と同じく今回も分からずに終わると思っていたけど、政治学のいろいろな考え方を理解できたように思う」、また「政治や経済のニュースが理解できるようになり、おもしろくなってきた（欠かさず見るようになった）」という感想が比較的多くみられ、過半数の学生が理解度についてポジティブなコメントを記入していた。特にテレビで見る国際、国内のニュースがよく理解できるようになっているというコメントが10名以上あった。そしてなかでももっとも興味深かったのが、提出用ワークシートの2.「理解が深まったこと」

に記述されたコメントには、投票に行くことの重要性について18名の学生が言及していた。そのなかでも、7名の学生が「この授業を聞いて初めて投票に行ってみた」という主旨の記述をしており、さらに「投票に行く前に自分の地域では何が変わるのか、生活により密接な部分（である）と考えるようになった」、「今は初めて投票してみようかと思える人を見つけられた」、「誰がやっても同じ、ではなく、この一票で変わるかもしれないと考えるようになった」、「公約について自分から知ろうとするようになった」といったより積極的な行動を示すコメントがみられた。

加えて、大学が実施する「講義に関するアンケート調査結果」においても、授業への理解度を示す質問6「この授業を履修して、自分にとって新しい知識や物事の見方が得られた」に対する回答としては、5段階（5点が強くそう思う）評価で、全回答者32名のうち、11名が5点、20名が4点、1名が3点を選択した。また授業への取り組み意欲を示す質問3「私はこの授業に意欲的に取り組んだ」に対する回答として、7名が5点、18名が4点、7名が3点を選択し、いずれも授業への理解度と意欲が高得点を示していることを裏付けているといえる。

4. むすびにかえて

以上の講義内容と学生の理解から、本学の学生が政治学の入門的知識を、用語や定義の概説的理解と、その内容に関連した歴史のおよび現代の事例について、シラバスに記載した目的について、講義内容の専門性は限定的であるとはいえるものの、本講義から達成できたといえるのではないだろうか。また本講義は政治学を専攻していない学生を対象とした講義であること、女子学生を対象としていたという点（政治と女性との関連については第1回と第3回の「政治体制」での自由民主主義体制の説明時において、日本の女性の政治参画の世界的ランクの低さを説明した程度であるが）において、「デモクラシーという原理をふまえて問題の所在を理解し議論する市民」の育成という政治学の目的、政治学の知識を高めることに一定の貢献ができたと考える。提出用ワークシートの回答からみても、今回の受講学生のなかから、将来政界への進出者や政治学研究者が出る可能性は高くはないかもしれないが、先述の投票に対する考え方の変化、とりわけ実際に7名の学生が初めて投票に行ったという行動の変化、また複数の学生の感想にもみられたような「受講前と比べて政治への理解が深まり、もっと深く勉強してみたくなった」や、「政治や経済のニュースが理解できるようになり、おもしろくなってきた」というコメントからも、有権者教育、すなわち本学においては今後就職し社会人として最低限の政治的関心と知識、また若年層の投票率上昇に貢献できたという点においても、政治学の入門としての本講義は意義があったと考えられる。

注

- 1 本講義においては、教科書に記述されている用語や定義の解釈や議論について、授業では一部教

科書以外の資料を用いて説明、提示したが、時間及び「入門」というレベル的な制約も考慮し、あくまで教科書の説明に基づいて講義を行った。

参考、引用文献

猪口孝、岡沢憲夫、スティーブン・R・リード、大澤真幸、山本吉宣『政治学辞典』弘文堂 2000年。
小野耕二「特集1 政治参加と市民教育 政治学の実践家への試み：政治参加の拡大へ向けて」学術の動向 2009年10月。

<https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/14/10/14_10_10_36/_pdf/-char/ja>

ケリー・ポール『政治学大図鑑』三省堂 2014年。

砂原庸介、稗田健志、多湖淳著の『政治学の第一歩』有斐閣 2015年。

日本学術会議 政治学委員会 政治学展望分科会「報告 政治学分野の展望－グローバル時代の市民社会を創造する政治学－」2010年4月5日。

<<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-h-1-9.pdf>> 2019年8月30日閲覧。

同上 政治学分野の参照基準検討分科会「報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 政治学分野」2014年9月。

<<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-h140910.pdf>> 2019年9月15日閲覧。

吉野篤『政治学』第2版 弘文堂 2018年。

資料 1.

提出用ワークシートの設問

第一回：私たちと政治

1. 「政治」と聞いて思いつく言葉を書いてください（3つ以上）。
 2. 興味のある社会問題を書いてください。最近のニュースで興味あること
 3. 教科書から、興味がありそうなテーマを選んで、理由を書いてください。
 4. この授業を選択した理由、この授業に期待したいことなどを記入してください。
(今日の講義の感想でもかまいません)
 5. 以下、任意（回答は自由です。回答が教員以外の目に触れることはありません。また成績には一切関係ありません。）
- ◎ 4月7日（日）の地方選挙の投票に行きましたか？（行った・行っていない）
なぜですか？

第二回：第1章「政治のとらえ方」

1. 今日の講義のキーワード（政治をとらえるにあたり、重要なキーワード）
：「政治学」とは、秩序、制度、権力、統治
の意味やイメージとして、あなたが考えていたものと、今日の授業で出てきた説明と、同じ点や違った点はありましたか。1つ以上選んで具体的に書いてください。
2. 囚人のジレンマゲームにおいて、あなたは裏切りと協力、どちらを選択し、結果どうなりましたか？また、そこから何を考えましたか？お互いに「協力」を選択するため

に、どのような話し合いをしましたか？

3. 今日の講義でわかりにくかったところ、また理解が深まったことについて書いてください。
4. 以下（任意・回答は自由です。回答が教員以外の目に触れることはありません。また成績には一切関係ありません。）昨日（4月21日）の地方選挙の投票に行きましたか？（行った・行っていない）なぜですか？

第三回：第2章「国家という枠組み」

1. 「国家」の定義（意味やイメージでも可）やその概念（考え方）として、あなたが考えていたものと、今日の授業で出てきた説明と、同じ点や違った点はありましたか。具体的に書いてください。
2. 破綻国家や失敗国家（脆弱国家）について、どんな事例が浮かびましたか？（調べたり、隣の人と話し合っって書いてもかまいません）
3. 国家（やその概念）、国民、国民国家（日本という国家の在り方なども含めても可）、また破綻国家や失敗国家について、今日の講義から理解したこと、考えたことについて1つ選んで書いてください。
4. 今日の講義でわかりにくかったところ、また上記以外で理解が深まったことがあれば書いてください。
（上記設問4. は以後各回に記載）

第四回：第3章「政治体制」

1. 「自由民主主義体制」について、民主主義という考え方について、あなたが考えていたこと（イメージでも可）と、今日の講義の内容と一致していた点、また違っていった点（学んだ点）について、具体的に書いてください。
2. 非自由民主主義体制（全体主義体制、権威主義体制、個人独裁制、軍事政権等）について、思いつく事例を挙げてください（隣の人と話し合っって書いてもかまいません。近代以前、近代以降でも可）。また、その事例とこれらの体制について、考えたことを具体的に書いてください。
3. 「a. 自由民主主義体制と経済発展との関係」、「b. 民主主義指数（Democracy Index）」のどちらかについて、あなたが考えたこと、また学んだことについて、具体的に書いてください。

第五回：第4章「選挙と投票」

1. 教科書 p. 63 で出てくる、憲法9条改正、脱原発、消費税増税の選好について、賛成か、反対か、書いてください（それぞれの意味や理解が詳しくなくてもかまいません。あくまで授業上の選好としますので、本当の選好と一致させなくてもかまいません。また、今回あなたが選択した選好が授業以外で使用されることは一切ありません）。隣

後、世界経済に貢献する方法として、上記の問題をふまえて、どのようなものがあると思いますか（あなたが今後学生や社会人としてどのように日本経済や国際経済に貢献していきたいと思うか、などでも可）。

第十二回：第12章「国際社会と集団・個人」

1. 今日の授業内容を聞いて、国際社会（国際関係）における国家主体（主権国家）の相互承認とその問題点について、あなたが理解したことを書いてください。
2. 今日の授業を聞いて、国際社会（国際関係またはその国内政治に対してでも可）における非国家主体（職業外交官、国際機構、NGO、企業、個人など）の役割や問題点について、理解したことを書いてください。
3. Case Study として、今世界が抱えている問題について1つ選び、国際社会はどう取り組んでいくべきであるのか、考えを書いてください（授業で出てきたものでも、少し調べてもかまいません）。またそのような問題に対して、あなたは今後学生や社会人としてどのように貢献できると思いますか、またしたいですか（直接的な貢献でも、そうでなくても可）。

最終回

1. 今日のプレゼンテーションを聞いて、印象に残ったテーマやプレゼンテーションと、それに対するコメントを書いてください。
2. 初回授業のワークシートをふりかえって、授業を受ける前と受けた後で、理解が深まったと思うこと、また考え方が変わったことがあれば書いてください。
3. 最後に、この授業の感想があれば書いてください。

資料 2.

レポートの提出課題内容

政治学レポート課題

2019年6月

◎内容について

1. 教科書にでてくる政治学のテーマ（章などで選択）を1つ選び、そのテーマに出てくる用語や定義の説明を、あなたが授業や日々の関心から学んだことやその理解（意見や考えも含む）を書いてください（ワークシートで書いたことを参考に膨らませるのもおすすめです）。
2. 上記1. で選択したテーマに関連する、実際の政治（政治学）の国内問題や国際問題を1つ選択し、本やインターネットで調べたことも含めてその問題について説明し、さらにテーマの理解（1. の説明や問題点）を含めて、あなたの考えや解決策について、記述してください。

◎分量

A4Word 形式、4 枚以上 5 枚以内（日本語でタイプすること）、参考文献も含む。

◎使用文献について ※注意事項※

1. については、授業指定の教科書やその他の政治学の教科書、政治学辞典などを使い、用語の説明をしてください。コピー&ペーストは不可。用語を使いながら自分で説明や要約をしてください。

2. については、本を最低 1 冊は使用すること。インターネットで検索してもかまいませんが、文献として信用できるホームページ（個人のブログは不可。政府や公的機関のホームページを使うようにしてください）を使用し、必ず出典を文献リストに記入すること。Wikipedia は閲覧可能ですが、文献として使用することは大学のレポートでは原則認められません。

グループプレゼンテーション（授業最終回）の課題内容

政治学第 13 回：グループワーク&プレゼンテーション

政治学を振り返って

以下の課題から 1 つ選び、次週の授業でプレゼンテーションをしてください。

- ①教科書のテーマから 1 つ（どれか 1 章）を選び、定義や問題点について挙げ、グループでそれぞれ考えたこと（提出したワークシートなど）についてまとめてプレゼンテーションをする（教科書で学んだ概念についての説明も使用すること）。
- ②昨日の参議院議員選挙の結果（投票に行った経験等をふまえて）について、グループで分析を行い、プレゼンテーションをする（その際、第 4 章「選挙と投票」、第 5 章「政党と政党システム」、第 6 章「政権とアカウンタビリティ」の授業で学んだ概念なども使用して説明すること）。

※レポートと同じ内容（論点）にならないようにしてください。あくまでプレゼンテーションのテーマとして、グループで取り組んでください。

発表時間：1 人約 2 分程度（グループの場合は×人数分）

1 グループ最大 6 人まで

（スライドなどがあることが望ましいですが、時間が限られているので、1 グループ 10 分程度におさめてください。）

